

金學載報告へのコメント(1)

武者小路 公秀
(PRIME 客員所員)

金先生のとてもすばらしく整理された板門店体制についての分析につけ加えることはありません。板門店体制の議論を今の問題とつなげて申し上げます。

皆さん、私が本当のことを言っていると思って聞いていただかないほうがいいということを先に申し上げます。私は7回ほど平壤に行きましたし、板門店は南から2回、北から2回、その2回は朝鮮の兵隊が私を守ってくれて、あとの2回は韓国の兵隊が私を守ってくれていました。ですから私は二重スパイです。もともと金大中(キム・デジュン)先生を尊敬していて、その意味では韓国に非常に近い。けれども、主体(チュチュ)思想に関心を持ってまして、その意味では朝鮮に非常に近い。ですから、私が言っていることは最も怪しいということで聞いてください。

いくつかのご質問をさせていただきます。私はその質問の意味を説明するという形で話をしますが、最終的には金先生がいろいろおっしゃった、例えばデュルケームのアノミーの問題やバンドン会議のところまでつなぎをつけてくださったことなど、大変大事な指摘について、まず共感と感謝の意を表します。そこで、以下の質問をさせていただきます。

第1に、朝鮮民主主義人民共和国の立場の関係について問題提起させていただきます。実は2000

年代の初め、川口順子さんが日本の外務大臣だったときに、ロシアのイワノフ外相と話をされて、そこでイワノフさんがとても大事なことを指摘してくれたことを新聞で読みました。私は1980年代から8回朝鮮を訪問して、とくに主体科学院の方々と話してきました。そのたびごとに考えていたことをイワノフさんが言ってくれたのです。アメリカやヨーロッパの人たちは、朝鮮が独裁国で、独裁者が1人で何かいろいろなことを決めていると思っていますが、全くそうではなく、朝鮮にはタカ派とハト派がいて、その両方の意見をきいて判断するという、金日成主席以来の決定のスタイルが続いています。タカ派というのは具体的に言うと、軍隊や諜報組織で、ハト派は国連などで働いている外交官や国内経済官僚です。

問題は、朝鮮には国連が経済制裁をすることで喜ぶ方々がいることです。それは軍隊などのタカ派の方です。要するに、ハト派が困るような経済制裁をしてくれれば、自分たちの力のほうが強くなる。だから経済制裁をするということはばかばかしい。国連はハト派をやっつける仕事に一生懸命になるのはやめるべきです。そうではなく、むしろハト派が働く場所を持てるように、なるべく経済を助ける措置をすべきだということをイワノフさんは言ったわけです。

そこで考えたいことは、金正恩委員長になって

核兵器を伸ばすか伸ばさないか、経済発展を大事にするかしないか、両方するんだという路線をとりました。核も伸ばすし経済も伸ばすという並進路線を出したわけです。彼のお父さんの金正日体制のときには先軍思想、要するに朝鮮の革命を担っているのは軍隊であると強調していた。実を言うと、それで主体思想と言うのはちょっといろいろ問題があって困ったと思っていたら、並進路線に移っただけではなく、非常にすばらしい核実験と飛翔体の実験をしたわけです。

これは非常に大事な意味を持っていたと私は喜んでます。核実験がいいとは私は絶対思いませんが、核実験をすることによって、金正恩委員長はとても大事なことをした。なぜかという、金正日時代からの朝鮮の基本的な政策でしたが、外国に若手の人たちを勉強に出しました。その1980年代以来の大仕事を完成させたのです。

金正恩体制のもとでも主体科学院というのが続いていると思います。主体思想のことは私も勉強しましたが、主体的だから外国のことはあまり考えていないと思っていたら、主体科学院の若手の人たちは、金正恩の世代よりも少し上から始まっていますが、みんな国連で仕事をしたり、ロシアなどに留学したりしています。金正恩委員長もジュネーブで勉強しました。

金正恩委員長は、外国で勉強した人たちが帰ってきたときに、ヨーロッパやアメリカのような生活が途切れてしまわないように、ぜいたくなアパートをたくさん黎明街につくり、朝鮮の将来を担う若手の専門家をそこに集めるという、とてもおもしろいことをしました。

それはとてもよかったのですが、外から見て私がちょっと心配したのは、タカ派の方々は黎明街の町並みをどう見ているのかという問題です。聞くことはできませんでしたが、私がかもし朝鮮の軍隊に入っていたら、外国でいろいろな考え方を勉強した人たちが帰ってきて、その人たちにぜいた

くをさせたら、とてもまずいことになると思います。日本の常識からいうと、海外で育った人たちというのは純粹の日本人ではない。実は私もそういうことを実感しているので、黎明街に住んでいる人たちはタカ派から嫌われているのではないかと心配していました。

そしたらその外国帰りの人たちが非常にすばらしい核実験と飛翔体の実験をやった。軍にしても諜報部にしても、文句をつけることはできない。要するに、外国で勉強した人たちをみんな国民的な英雄にしてしまったわけです。それによってタカ派と外国帰りのハト派を重要視し、軍隊や諜報部がどんなことを考えているのか心配する状態を全部なくし、むしろ黎明街に住んでいる人たちは国民の英雄であるというすばらしい状態にできたから、平昌オリンピックにみんなで一緒に行っても、タカ派とハト派がぶつかるということにはなかった。そこに意味があった。金正恩委員長は、すばらしい形でハト派とタカ派をまとめあげてしまったのです。

つまり、核兵器の問題と平和と分断の問題を乗り越えるということと、実は非核化を先にやってしまったら、やっぱりタカ派は非常に不満に思う。タカ派が不満に思わないような形で分断を乗り越えるということが、タカ派とハト派によって統一できたということは、結局、核や飛翔体の実験が、平和のためにもなった。核は、そういう意味でとてもよかったのではないか。それをその後どういうふうにすればいいのか。今後、核戦略から平和経済構築に若手専門家に重点をきりかえていくかという問題があります。そのことについて、金先生のお考えを伺いたいと思います。

今いろいろな問題になっているトランプ大統領とのやり取りが、あくまでも新冷戦の予行演習と私は思っているということを申し上げた上で、第2の問題に移ります。トランプは新しい冷戦を始める準備をしています。その前にいろいろな予行演

習をしておく必要がある。第2次大戦の予行演習として、ヒトラーはスペイン内戦を利用してゲルニカを空襲しました。トランプは斬首作戦も含んだ専門家をアメリカから派遣して、軍事演習を一時中止したあとで、また続けようとしています。その軍事演習と核実験がぶつかったわけですが、予行演習という形で新しい冷戦が始まる準備と考えると、この朝鮮の核実験はロシアの新しい冷戦における役割を支えていると思います。

核実験と飛翔体の実験に成功した朝鮮軍の核戦略部隊が、行進をするときに「マンセー！」と言う代わりに、拳を上げて「フラー！フラー！フラー！」と三回さけぶのをテレビでみました。私はロシア革命が好きなのですが、ロシア革命以来のソ連軍の雄たけびの声を聞かせてくれたわけです。しかし、その声が聞こえるということは、要するに英雄になった外国で勉強したかなりの人たちは、ロシアやウクライナなどその周りで勉強していただろうということです。そのことは金正恩委員長も高く評価しています。ロシアが新しい冷戦の中で出てこなかったら、ロシアと朝鮮はあまり関係ないということになり、結局は中国と朝鮮のつながりだけが出てきてしまう。金正恩委員長はそうではなく、バランスをとって、中国ともロシアとも対等につき合うということをしています。

やはり主体性ということを大事にする意味では、中国との関係とロシアとの関係のバランスをきちんととらなければなりません。しかし、そのことは金先生の分析にもあるように、アジアの枠の中でかなりアメリカと中国とロシアの間の問題に引きずり込まれるおそれがあるのではないかと、ということについての質問をさせていただきます。

具体的に申しますと、今ベトナムで米朝会談が進むようになっていますが、進んでいる間に、実はアメリカは核戦略を全部廃止しました。つまり、核戦略というものを金正恩委員長が進めていたのは、恐らく核戦略という考え方の最後の実験で

あったと思います。つまり、核というものは使えるものではない。使ったらみんな共倒れる。だから使わないで抑止政策、使わないことが核戦略部隊の役割であったわけです。

しかしブッシュ元大統領の考え方では、今のIMSも廃棄する。ロシアとアメリカとの間にある中距離弾道弾をなくすための政策を全部オジャンにして、むしろ今アメリカがつくっているのは小型化した実戦に使いやすい、つまり潜水艦に載せていろいろなところに使えるような核兵器を開発し、完成させ、それを使う方向に行く。そうすると、大西洋ではロシアと潜水艦を使った、戦争はしないかもしれませんが、少なくとも核兵器を開発する競争をし、太平洋とインド洋では中国と海洋核競争が始まろうとしています。

ということは、新しい冷戦はもう始まっているけれども、きちんとしたルールがない。昔のソ連とのアメリカとの冷戦は、ソ連側のCOMECONと米国と西欧のNATOとは少なくとも軍備管理ということで、お互いに一応枠を決めて核開発をやっていましたが、もうそれをしないということがアメリカ側で決まってしまった。

そのかわり、中国としてはやはりアジアだけではなく、アフリカなどにも勢力を伸ばすために、一带一路ということで平和的ですが海軍の勢力も支える形で計画しています。いろいろやっています。

プーチン大統領はどう考えているかわかりませんが、一带一路の一带というのはシルクロードですが、シルクロードというのは、実を言うと大部分が旧ソ連の一部であったり、今もロシアと友好関係にあるウズベキスタンやキルギスタンなど、何とかスタンというのはトルコ系のイスラムの国ですが、それはみんな一回社会主義に入っています。

初めから独立して今も独立しているのはモンゴル共和国ですが、ほかのウズベキスタンなどは、

国連大学での中央アジアの平和問題の会議を開いて当時私は笑われましたが、今の一帯一路の一部分は、実はロシアの影響が強いところに習近平(シー・ジンピン)主席は中国の道をつくってしまったので、一体そこでどういうふうに折り合いがつくのかという問題もあります。

そういうところに、金先生がバンドン会議のことを引用しご指摘されましたが、そこにもう一回戻らないといけません。つまり朝鮮の統一ということを中心に考えるためには、非同盟でないはず。あまりアメリカのほうについても困るし、アメリカと競争する中国やロシアのほうについても困る。やはりバンドン的な「非同盟」の考え方が必要になってくるのではないかというのが、第2の私の質問です。

第3の質問は、非核化の問題です。朝鮮半島を非核化することになると、当然アメリカの問題が出てきます。それはトランプ政権以前から、1970年代以来、アメリカの地球的な戦略は前方展開、つまりなるべくいろいろな戦争が起こりそうなところの近くに基地を置く。そしてすぐにアメリカに反対する軍事勢力が出てきたらただちにたたきという状態をつくるのが、forward deployment、つまり前方展開を必要とします。

今問題なのは、韓国が前方展開になって朝鮮と対峙している。統一と平和のためには、朝鮮半島が前方展開から外されないといけない。そうすると、前方展開の最前線基地は日本になるわけです。つまり日本列島、特に琉球弧と朝鮮半島が新冷戦の境目になる。

オーストラリアの日本研究者のギャバン・マコーマックという人が非常に正しいことを言っていますが、今日本は安倍政権のもとで、アメリカの属国になっていると彼は指摘しています。属国というのは、英語でclient stateです。つまり、アメリカが親分で日本は子分という恩顧主義的な関係にある。恩顧主義ということは、今官邸を中心

とした付度政治が行われているのは、まさに安倍さんの恩顧主義の国内政治だといえます。

ただ、アメリカは日本の大親分だけれども、日本の国内政治の親分はやはり安倍さんです。だから安倍さんは親分であるけれども、大親分はアメリカだという恩顧関係の秩序ができあがっています。そういう形の恩顧主義の政治が今日本で行われている。この中で一番苦労しているのは、在日コリアンの皆さんだと客観的に思います。それを言うと、反日インテリだと言われますが、その面もあります。逆に言うと、日本は朝鮮半島の非核化の中で、朝鮮、韓国と日本の関係が出てきます。

韓国の海軍が朝鮮の漁船を保護しているところに日本の自衛隊航空機がやってきて、韓国側がレーダーを当てたということで問題になっています。これは私の解釈で、間違いであることを願っていますが、日本の自衛隊は当然分裂を乗り越えようとしている朝鮮半島に強い関心を持っている。だから、韓国海軍はどういうふうに朝鮮の漁船とつき合っているのか、低空飛行して見ようとした。当然、低空飛行して見ようとしたら、それに対抗してレーダーで監視するのは当然のことです。ですから、この事件というものは将来我々がちゃんとしなければ、つまり日本の非核化だけでなく、朝鮮半島とつながった形で日本を考えることができないと、米国の属国日本のいろいろな問題が非常に深刻な形で押し寄せる。

そのところでやっぱりバンドンの非同盟ということを中心に日本も考える必要があると思います。今のアメリカの属国になっている限りでは、日本は金先生の分析、要するに非核化をすると日本とアメリカからの核の脅威がふえる。それから、分裂を乗り越えることに当然日本との問題が出てくる。そういう意味で、金先生のお話の中で、アノミーがある、つまりちゃんとした社会的・経済的あるいは文化的な、そこに住んでいる人たちの相互理解、お互い平等につき合うことがない限り

出てこない秩序感を、どういうふうにつくり出すかということで、日本がこれまでした悪いことをきちんと確認し、真実を認めた上で和解をする。そういうことを我々がやらない限り、東北アジアの平和は難しい。

最後に一つにお伺いしたいのは、先ほど複雑系のことをご指摘になりましたが、グローバル化の複雑系というのは、いわゆるハイブリッドの問題が中心にあります。ハイブリッドというのは、要するにまぜ合わせになってしまうということです。ハイブリッドということで今非常に注目されていますのが、将来の人類の生き残りの一番の条件は、移住者コミュニティというものがいろいろなところにあることです。在日コリアンのコミュニティも、いわゆるハイブリッド化の中での一つの重要な現象です。その現象を、日本だけでなく、移住者のコミュニティがたくさんあるところでその問題が出てきますが、移住者に対して、右翼の憎悪主義的なヘイトクライムがたくさん出てくる。それが日本でも起こっているわけです。

しかし、そのヘイトクライムを乗り越えて、マルチ・ローカル・ライヴリフッド (multi-local-livelihood) という言葉が今出てきています。今までの常識では、それぞれ自分のlivelihood (生活圏) は一つしかなかった。しかし、移住者は日本に来たからといって韓国や朝鮮のことを忘れてしまうわけではありません。つまり、一つのところだけでなく、心も体も二つのところに住んでいる人たちがだんだんふえてきている。もちろん日本の中でも、東京と二重居住籍がある人たちがたくさんいます。それがふえればふえるほど、摩擦も多いけれども協力をする。一緒に暮らすことができれば、複雑な形で、むしろ地域の平和の前提になる。

それを実現していく方向でアノミーを克服し、それを非同盟的な形でバンドンにつなげる。何かそういう真実と和解が必要ではないかということ

を申し上げて、金先生のご報告に対する私の質問とさせていただきます。ありがとうございました。